

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2017-178374

(P2017-178374A)

(43) 公開日 平成29年10月5日(2017.10.5)

(51) Int.Cl.	F 1	テーマコード (参考)
B 6 5 D 25/28 (2006.01)	B 6 5 D 25/28 1 O 1 B	3 E 0 3 3
B 6 5 D 1/26 (2006.01)	B 6 5 D 1/26 1 1 O	3 E 0 6 2
B 6 5 D 1/44 (2006.01)	B 6 5 D 1/44	

審査請求 未請求 請求項の数 4 O L (全 9 頁)

(21) 出願番号 特願2016-68852 (P2016-68852)
 (22) 出願日 平成28年3月30日 (2016. 3. 30)

特許法第30条第2項適用申請有り 平成28年2月22日に、名古屋国際会議場（愛知県名古屋市熱田区熱田西町1番1号）内白鳥ホールで開催された「リスパック NEXT 2016 SPRING」（主催者リスパック株式会社）にて発表・展示

(71) 出願人 396000422
 リスパック株式会社
 岐阜県岐阜市神田町九丁目27番地
 (74) 代理人 110000659
 特許業務法人広江アソシエイツ特許事務所
 (72) 発明者 坂井 秀行
 愛知県犬山市羽黒宮浦1番地 リスパック株式会社内
 Fターム(参考) 3E033 AA08 BA13 CA02 DA08 DC03
 DE01 EA05 FA01 FA04 GA02
 3E062 AA10 AB02 AC02 BB01 BB10
 HA03 HB02 HB08 HB09 HC01

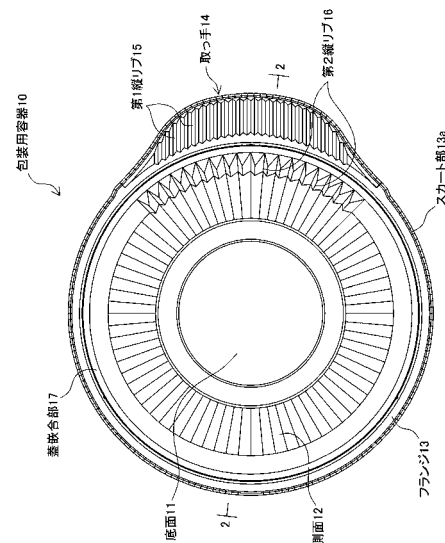
(54) 【発明の名称】 カップ状の包装用容器

(57) 【要約】

【課題】肉厚が薄くて均等な厚さの合成樹脂シートを材料としても、手指を掛ける部分として十分な剛性を有する取っ手を備えることができ、この取っ手を利用すればテーブルが無くても容器内の内容物を容易に食することができ、しかも使い捨てできるカップ状の包装用容器を提供すること。

【解決手段】側面12に当てられた人の手指を上方から覆うことになる取っ手14をフランジ13の一部に連続させるとともに、この取っ手14が縦方向かつ外方向に延びる第1縦リブ15を多数有すること。

【選択図】 図1



【特許請求の範囲】

【請求項 1】

肉厚が 0.15 mm～1.00 mm の合成樹脂シートにて構成されて、底面と、この底面に連続する側面と、この側面の開口周縁に形成したフランジ、とを有したカップ状の包装用容器であって、

前記側面に当てられた人の手指を上方から覆うことになる取っ手を前記フランジの一部に連続させるとともに、この取っ手が縦方向かつ外方向に延びる第 1 縦リブを多数有することを特徴とするカップ状の包装用容器。

【請求項 2】

前記フランジの外側に連続しているスカート部を、前記取っ手の外周縁全体に連続させたことを特徴とする請求項 1 に記載のカップ状の包装用容器。

10

【請求項 3】

前記側面に、少なくとも前記各第 1 縦リブの下端に近接させた第 2 縦リブを多数有することを特徴とする請求項 1 または請求項 2 に記載のカップ状の包装用容器。

【請求項 4】

前記各第 2 縦リブは、当該包装用容器の横断面でみたとき、左右の傾斜面が頂点で交差することを特徴とする請求項 3 に記載のカップ状の包装用容器。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

20

本発明は、包装用容器に関し、特に、合成樹脂シートによってカップ状に成形した包装用容器に関するものである。

【背景技術】

【0002】

手で持って使用する場面の多い「カップ状容器」、あるいは「丼状容器」を、合成樹脂シートという薄い材料によって成形する場合には、手から滑り落ちないようにする工夫が必要である。この工夫としては、例えば特許文献 1 にて提案されているような「飯茶わん」がある。

【0003】

この特許文献 1 にて提案されている「飯茶わん」は、「手の不自由な者が食事をする場合に使い易いようにした飯茶わんを提供すること」を目的としてなされたもので、図 7 にも示すように、「飯茶わんの外側面に、手の指がその内側で引っ掛かる逆 U 字状の把手を形成した」ものである。

30

【先行技術文献】

【特許文献】

【0004】

【特許文献 1】 実用新案登録第 3072349 号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

40

この特許文献 1 にて提案されている「飯茶わん」は、当該文献の段落 0008 に記載されているように、「飯茶わんは例えば陶磁器製からなる」ものであるから、飯茶わん自体がある程度の剛性を有したものであるから、茶わんの外側面に形成した逆 U 字状の把手も、陶磁器製からなる茶わんによって剛性を有したものとすることができると考えられる。そして、このような陶磁器製からなる茶わんであると、簡単には「使い捨て」できるものにはならない。

【0006】

そこで、この特許文献 1 にて提案されている「取っ手部分」を、肉厚が薄くて均等な厚さの合成樹脂シートを材料としながら、「使い捨て可能」なカップ状の包装用容器に適用しようとした場合、「取っ手部分」の剛性確保は容易ではない。何故なら、この特許文献

50

1の「取っ手部分」は、言わば片持ちで支持する取っ手を、手の指がその内側で引っ掛かる単純な逆U字状に形成しただけであるから、合成樹脂シートを材料としてこの取っ手を形成したとき、当該容器や取っ手について、カット野菜やフルーツを収納したときの重量に耐えられる剛性を付与することは容易ではないと予測されるからである。

【0007】

そこで、本発明者等は、肉厚が薄くて均等な厚さの合成樹脂シートを材料として、取っ手を備えたカップ状の包装用容器を成形する場合に、取っ手を十分な剛性を有するものとするにはどうしたらよいか、について種々検討を重ねてきた結果、本発明を完成したのである。

【0008】

すなわち、本発明の目的とするところは、肉厚が薄くて均等な厚さの合成樹脂シートを材料としても、手指を掛ける部分として十分な剛性を有する取っ手を備えることができ、この取っ手を利用すればテーブルが無くても容器内の内容物を容易に食することができ、しかも使い捨てできるカップ状の包装用容器を、簡単な構成によって提供することにある。

【課題を解決するための手段】

【0009】

以上の課題を解決するために、まず、請求項1に係る発明の採った手段は、後述する最良形態の説明中で使用する符号を付して説明すると、

「肉厚が0.15mm～1.00mmの合成樹脂シートにて構成されて、底面11と、この底面11に連続する側面12と、この側面12の開口周縁に形成したフランジ13、とを有したカップ状の包装用容器10であって、

側面12に当てられた人の手指を上方から覆うことになる取っ手14をフランジ13の一部に連続させるとともに、この取っ手14が縦方向かつ外方向に延びる第1縦リブ15を多数有することを特徴とするカップ状の包装用容器10」である。

【0010】

この請求項1に係るカップ状の包装用容器10は、図1～図4に示すように、底面11と、この底面11に連続する側面12と、この側面12の開口周縁に形成したフランジ13、とを有したものとして、肉厚が0.15mm～1.00mmの合成樹脂シートにて構成したものであるから、特許文献1に記載されている陶磁器製のものより断然軽いものとなっており、使い捨てし易いものとなっている。

【0011】

ここで、包装用容器10を構成するための合成樹脂シートの肉厚が、0.15mm～1.00mmである必要があるが、その理由は、肉厚が0.15mmより薄いと、内容物を収納する容器としての剛性確保ができなくなるからであり、肉厚が1.00mmより大きければ、この合成樹脂シートの熱成形自体が困難になるからである。

【0012】

この包装用容器10では、図1等にしたように、取っ手14がフランジ13の一部に連続した状態で一体成形してあり、この取っ手14は、図3及び図4の各(b)に示すように、当該包装用容器10の側面12に当てられた人の手指を上方から覆うことができるように、つまり、特許文献1における「把手」のように、手指がその内側で引っ掛かる逆U字状に形成したものである。

【0013】

また、この取っ手14には、図1～図3に示すように、縦方向かつ外方向に延びる第1縦リブ15が多数形成してある。ここで、各第1縦リブ15が縦方向に延びるとは、図3の(b)に示すように、当該包装用容器10の側面12に手を当てて取っ手14上にも親指を掛けた状態を見たときに、横方向になっている人差し指に対して、各第1縦リブ15は直交している、つまり縦方向になっていることを意味する。また、各第1縦リブ15が外方向に延びるとは、図1、及び図2の(a)に示すように、取っ手14に形成した各第

10

20

30

40

50

1 縦リブ 15 は、当該取っ手 14 が U 字状に湾曲しながらも外方向に延びているのに応じて、外方向に延びていることを意味する。

【0014】

以上のように、この請求項 1 の包装用容器 10 が、側面 12 に当てられた人の手指を上方から覆うことになる取っ手 14 をフランジ 13 の一部に連続させたものであるから、この取っ手 14 に手指を掛けながら当該包装用容器 10 を持てば、テーブルが無くても包装用容器 10 内の内容物を容易に食することができることになる。また、当該包装用容器 10 が薄くて均等な肉厚の合成樹脂シートを材料としたものであっても、取っ手 14 が縦方向かつ外方向に延びる第 1 縦リブ 15 を多数有したものであるから、これらの第 1 縦リブ 15 が手指を掛ける部分としての取っ手 14 に十分な剛性を付与することができるのである。

10

【0015】

さらには、取っ手 14 に形成してある各第 1 縦リブ 15 が、当該取っ手 14 に手指を掛けたときの「滑り止め」の役目も果たすことになるから、当該包装用容器 10 を手で持って内容物を食するときに、当該包装用容器 10 は手指から滑り落ちにくくなっているのである。以上の結果、取っ手 14 に手指を掛けることによって当該包装用容器 10 をしっかりと持つことができるから、周囲にテーブルがなくても、当該包装用容器 10 内の食品を、例えば立ったまま食することが可能となるのである。

【0016】

ところで、この包装用容器 10 における取っ手 14 は、これに手指を掛けて当該包装用容器 10 全体を片手でも持てるようにするものであるから、その側面視での幅（フランジ 13 の周方向の長さ）を、25mm 以上とすることが好ましい。例えば、成年男子が当該包装用容器 10 を使用する場合、上記取っ手 14 の下に人差し指を掛けるのであるが、一般成年男子の人差し指における「中節骨」や「基節骨」の幅が 25mm 程度であることが多いため、この取っ手 14 の側面視での幅を 25mm 以上としておけば、この取っ手 14 には、人差し指のほぼ全体を自然に掛けることができることになる。

20

【0017】

従って、この請求項 1 に係る包装用容器 10 は、肉厚が薄くて均等な厚さの合成樹脂シートを材料としても、手指を掛ける部分として十分な剛性を有する取っ手 14 を備えることができ、この取っ手 14 を利用すればテーブルが無くても内容物を容易に食することができ、しかも使い捨てできるものとなっているのである。

30

【0018】

また、上記課題を解決するために、請求項 2 に係る発明の採った手段は、上記請求項 1 に記載のカップ状の包装用容器 10 について、

「フランジ 13 の外側に連続しているスカート部 13a を、取っ手 14 の外周縁全体に連続させたこと」

である。

【0019】

この請求項 2 の包装用容器 10 では、この種の包装用容器が本来的に有しているフランジ 13 のスカート部 13a を、図 1～図 3 に示すように、取っ手 14 の外周縁全体にも連続させたものであるから、このスカート部 13a が、フランジ 13 の剛性を確保するという本来的な機能を発揮するとともに、一部がフランジ 13 に連続している取っ手 14 についても、その剛性確保機能を発揮することになるのである。

40

【0020】

そして、この取っ手 14 の外周縁全体に連続させたスカート部 13a は、フランジ 13 に連続している取っ手 14 をパンチ（オス型）・ダイ（メス型）で打ち抜く際に同時に形成できるから、従来から採用されている技術を適用するだけで、容易に形成できるものとなっている。

【0021】

従って、この請求項 2 に係る包装用容器 10 は、上記請求項 1 のそれと同様な機能を発

50

揮する他、取っ手 14 について、周囲のスカート部 13a と前述した第 1 縦リブ 15 との相乗機能によって、剛性がより高められたものとなっているのである。

【0022】

さらに、上記課題を解決するために、請求項 3 に係る発明の採った手段は、上記請求項 1 または請求項 2 に記載のカップ状の包装用容器 10 について、

「側面 12 に、少なくとも各第 1 縦リブ 15 の下端に近接させた第 2 縦リブ 16 を多数有すること」

である。

【0023】

この請求項 3 に係る包装用容器 10 では、少なくとも取っ手 14 の下方に位置する側面 12 に、取っ手 14 に形成してある各第 1 縦リブ 15 の下端に近接させた第 2 縦リブ 16 が多数形成してあるから、図 3 の (b) にも示すように、取っ手 14 に手指を掛けながら当該包装用容器 10 を持った際に、これら第 2 縦リブ 16 が当該包装用容器 10 や取っ手 14 に手指を掛けたときの「滑り止め」の役目も果たすことになるから、当該包装用容器 10 を手で持って内容物を食するときに、当該包装用容器 10 は手指から滑り落ちにくくなるのである。なお、後述する実施形態の側面 12 には、平面部 12a を残してその下側全体に第 2 縦リブ 16 を形成する場合が示してあるため、この請求項 3 では、この場合も想定して、少なくとも取っ手 14 の各第 1 縦リブ 15 の下端に近接させた第 2 縦リブ 16 についての限定を行っているのである。

【0024】

勿論、これらの多数の第 2 縦リブ 16 は、これが形成してある側面 12 の補強も行っているのであるから、当該包装用容器 10 の上述した持ち易さをより十分に発揮するだけでなく、包装用容器 10 自体の不可逆変形をも防止して、使用感がより一層高められることになる。

【0025】

従って、この請求項 3 に係る包装用容器 10 は、上述した請求項 1 または 2 と同様な機能を発揮する他、各第 2 縦リブ 16 による使用感の増大が図れたものとなっているのである。

【0026】

そして、上記課題を解決するために、請求項 4 に係る発明の採った手段は、上記請求項 3 に記載のカップ状の包装用容器 10 について、

「各第 2 縦リブ 16 は、当該包装用容器 10 の横断面でみたとき、左右の傾斜面 16a が頂点 16b で交差するものであること」

である。

【0027】

この請求項 4 に係る包装用容器 10 では、図 5 及び図 6 に示すように、各第 2 縦リブ 16 が、当該包装用容器 10 の横断面でみたとき、左右の傾斜面 16a が頂点 16b で交差するものであるから、特に図 6 に示すように、当該包装用容器 10 内に収納したカット野菜等の収納物にドレッシング等の調味料を入れてカトラリー 20 で掻き混ぜるにあたって、このカトラリー 20 の先端の動きを円滑にするのである。

【0028】

何故なら、各第 2 縦リブ 16 は頂点 16b の両側にある傾斜面 16a が「V 字状」を構成しているから、カトラリー 20 の先端を図 6 中に示した何れの矢印方向に動かしたとしても、カトラリー 20 の先端は各傾斜面 16a に案内されながら頂点 16b を越えることができるから、このカトラリー 20 の先端の動きが円滑になる。それだけでなく、カトラリー 20 を包装用容器 10 内で動かす際に、カット野菜等の収納物も包装用容器 10 内で円滑に移動するのである。

【0029】

従って、この請求項 4 に係る包装用容器 10 は、上記請求項 3 と同様な機能を発揮する他、カトラリー 20 の先端の動きを円滑にするものとなっているのである。

【発明の効果】

【0030】

以上、説明した通り、本考案に係る包装用容器10は、

「肉厚が0.15mm～1.00mmの合成樹脂シートにて構成されて、底面11と、この底面11に連続する側面12と、この側面12の開口周縁に形成したフランジ13、とを有したカップ状の包装用容器10であって、

側面12に当てられた人の手指を上方から覆うことになる取っ手14をフランジ13の一部に連続させるとともに、この取っ手14が縦方向かつ外方向に延びる第1縦リブ15を多数有すること」

にその構成上の主たる特徴があり、これにより、肉厚が薄くて均等な厚さの合成樹脂シートを材料としても、手指を掛ける部分として十分な剛性を有する取っ手14を備えることができ、この取っ手14を利用すればテーブルが無くても容器内の内容物を容易に食することができ、しかも使い捨てできるカップ状の包装用容器10を、簡単な構成によって提供することができたのである。

【図面の簡単な説明】

【0031】

【図1】本発明に係る包装用容器10の平面図である。

【図2】同包装用容器10を示すもので、(a)は側面図、(b)は(a)中の1-1線に沿ってみた横断端面図である。

【図3】同包装用容器10を示すもので、(a)は正面図、(b)は取っ手14を利用しながら当該包装用容器10を手指で持った状態の正面図である。

【図4】同包装用容器10を示すもので、(a)は図1中の2-2線に沿ってみた縦断端面図、(b)は取っ手14を利用しながら当該包装用容器10を手指で持った状態の縦断端面図である。

【図5】同包装用容器10の、側面12及び取っ手14、これらに形成してある第2縦リブ16及び第1縦リブ15を示す部分拡大平面図である。

【図6】図2の(b)中に示した第2縦リブ16とカトラリー20との関係を示す部分拡大横断端面図である。

【図7】特許文献1に提案された技術を示す側面図である。

【発明を実施するための形態】

【0032】

以上のように構成した各請求項に係る発明を、図面に示した実施の形態である包装用容器10について説明すると、図1には本実施形態に係る包装用容器10の平面図が示してある。この包装用容器10の基本構成は、底面11と、この底面11に連続する側面12と、この側面12の開口周縁に形成したフランジ13、とを有したカップ状のものにしたことである。また、この包装用容器10は、肉厚が0.15mm～1.00mmの合成樹脂シートを熱成形することにより形成したものであるが、肉厚を0.55mmとした合成樹脂シートを採用するのが、成形性・剛性の点で最も好ましい。

【0033】

本実施形態の包装用容器10では、図2及び図3に示したように、その側面12の一部上部に平面部12aを形成し、この平面部12aの下側全体に後述する第2縦リブ16が形成してある。平面部12aを形成していない部分に形成した第2縦リブ16については、後述する取っ手14に形成した各第1縦リブ15の下端に近接できる位置まで延在させた状態で形成してある。

【0034】

また、フランジ13の外側には、図1にも示したように、一般的な容器がそうであるように、このフランジ13から下方に垂れるスカート部13aが一体的に形成してあって、このスカート部13aの存在によって、当該フランジ13の平面性が確保できるようにしてある。そして、このフランジ13の内側全体には、図4の(a)にも示したように、蓋嵌合部17が形成してあって、この蓋嵌合部17には蓋体18が嵌合されることになるの

である。

【0035】

さて、この包装用容器10のフランジ13の一部には、図1にも示したように、取っ手14をフランジ13に連続させた状態で一体成形してあるが、この取っ手14は、図3及び図4の各(b)に示したように、側面12に当てられた人の手指を上方から覆うことができるような形状にしたものである。また、この取っ手14の内側には、図1に示したように、上述したフランジ13が連続してきており、このフランジ13のスカート部13aについては、図1～図3に示したように、当該取っ手14の外側周縁にも連続させてある。

【0036】

また、この取っ手14には、図1～図3に示したように、当該包装用容器10の縦方向かつ外方向に延びる第1縦リブ15が多数形成してある。なお、本実施形態における各第1縦リブ15は、これらを横断的に見たときに、後述する第2縦リブ16と同様に、左右の傾斜面が頂点で「V字状」に交差するものとしてある。

【0037】

これらの第1縦リブ15に対しては、図2及び図3に示したように、側面12に形成してあって、取っ手14の下方になっている多数の第2縦リブ16の上端が、当該各第1縦リブ15の下端に近接するように延在させてある。取っ手14の下方になっているこれらの第2縦リブ16は、図3の(b)にも示したように、取っ手14に手指を掛けながら当該包装用容器10を持った際に、これら第2縦リブ16が当該包装用容器10や取っ手14に手指を掛けたときの「滑り止め」の役目も果たすものである。

【0038】

側面12の下部の一部や取っ手14の直下にまで延在させた各第2縦リブ16については、図5及び図6に示したように、当該包装用容器10の横断面でみたとき、左右の傾斜面16aが頂点16bで交差するようにしたものである。このように形成した各第2縦リブ16は、特に図6に示したように、当該包装用容器10内に収納したカット野菜等の収納物にドレッシング等の調味料を入れてカトラリー20で掻き混ぜるにあたって、このカトラリー20の先端の動きを円滑にするのである。

【0039】

何故なら、各第2縦リブ16は頂点16bの両側にある傾斜面16aが「V字状」を構成しているから、カトラリー20の先端を図6中に示した何れの矢印方向に動かしたとしても、カトラリー20の先端は各傾斜面16aに案内されながら頂点16bを超えることができるから、このカトラリー20の先端の動きが円滑になる。それだけでなく、カトラリー20を包装用容器10内で動かす際に、カット野菜等の収納物も包装用容器10内で円滑に移動するのである。

【符号の説明】

【0040】

- 10 包装用容器
- 11 底面
- 12 側面
- 12a 平面部
- 13 フランジ
- 13a スカート部
- 14 取っ手
- 15 第1縦リブ
- 16 第2縦リブ
- 16a 傾斜面
- 16b 頂点
- 17 蓋嵌合部
- 18 蓋体

10

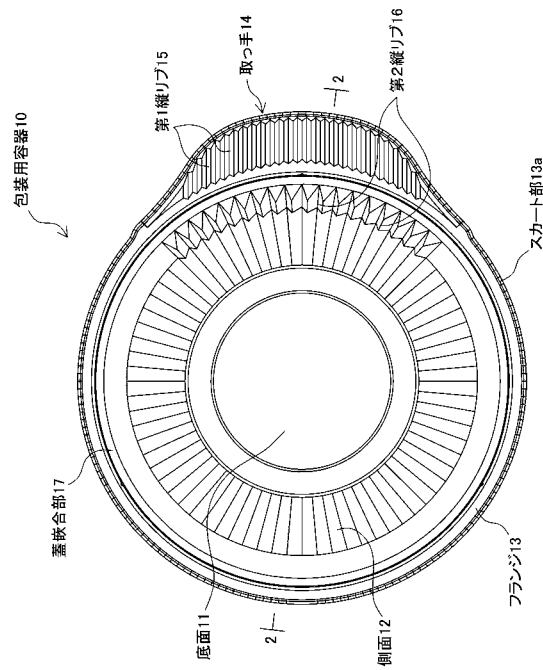
20

30

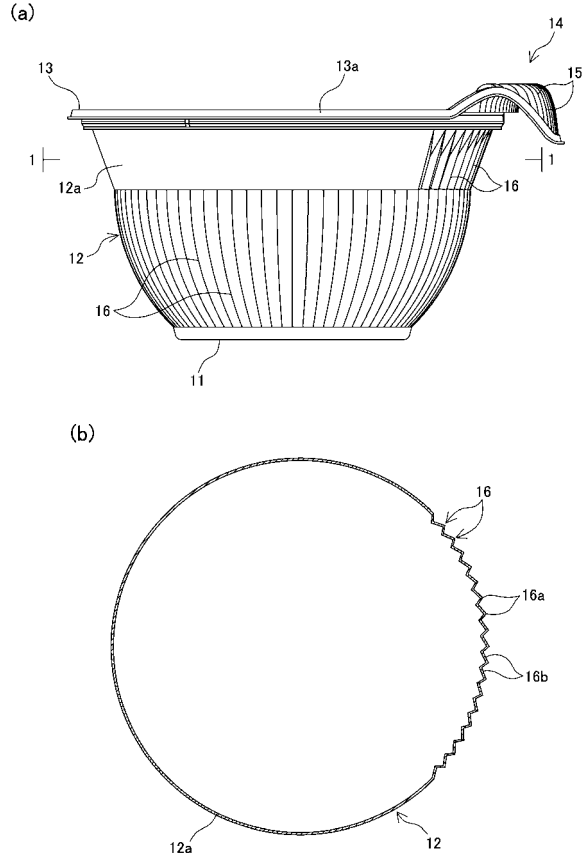
40

50

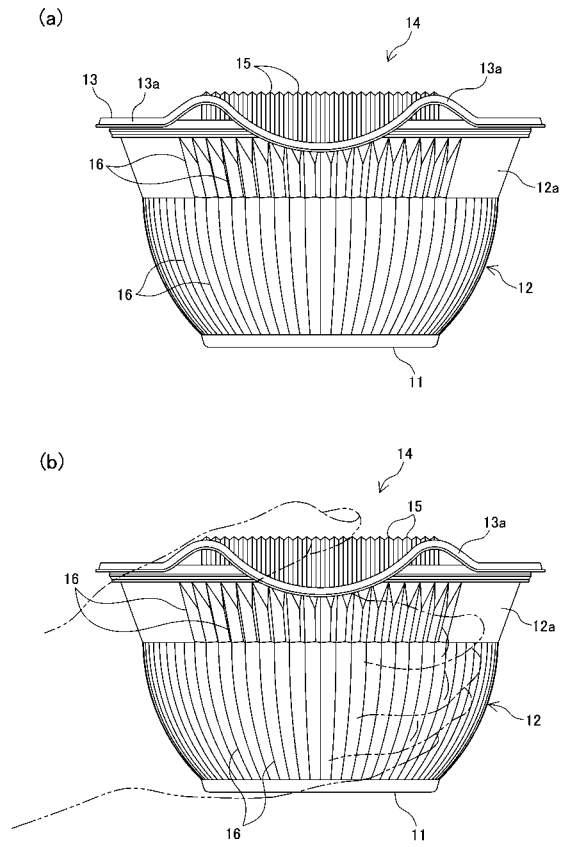
【図 1】



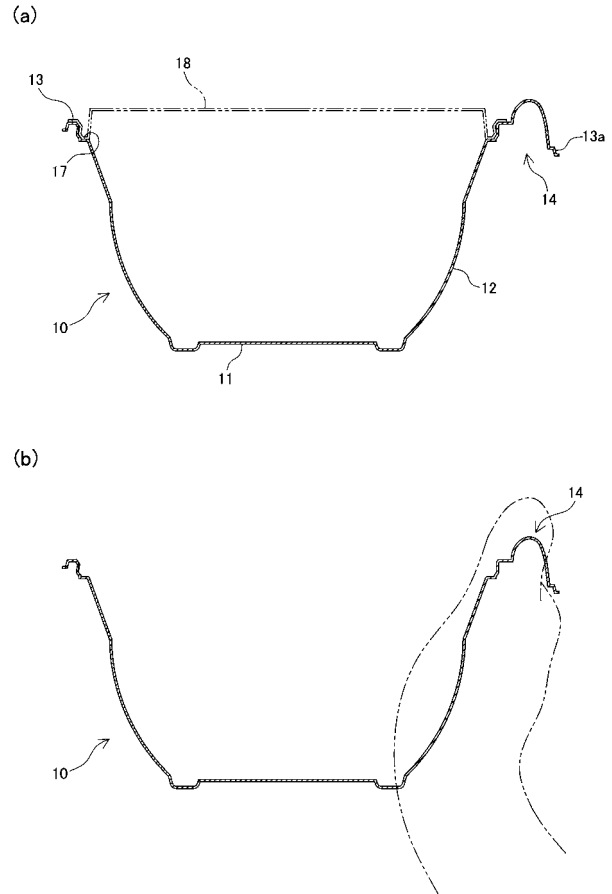
【図 2】



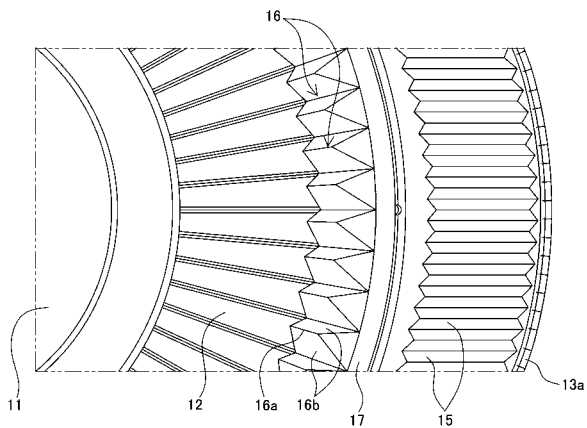
【図 3】



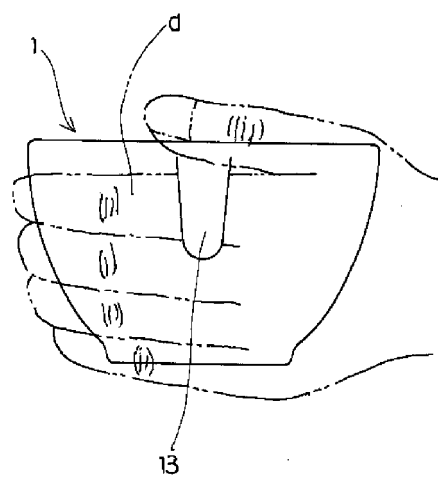
【図 4】



【図 5】



【図 7】



【図 6】

